

# 記事抜粋

2021/4/14 スポーツ報知 掲載

刈谷さん(S58年卒寮)伝説伝えた元NHKアナ

体操ニッポン 栄光への架け橋

富田さん 伝説演じた順大コーチ

(取材・構成=小河原俊哉、小林玲花)

## 【指導者となった富田氏と対面】

刈屋氏(以下、刈屋)

「お会いするのは一昨年以来ですね。アテネのあの栄光の瞬間から今年の夏で17年になります」

富田氏(以下、富田)

「もう17年なんですよ」

刈屋「今は指導者となり、順天堂大でコーチを務められている。指導者となって迎える東京五輪になります」

富田「コロナ禍で五輪が延期になり、大学の練習場も一時は封鎖され、選手も練習の制限を余儀なくされました。私自身もスポーツの在り方や価値について揺らいだ時期もありました。支援する一企業の業績が悪化したらスポーツが整理対象になるんじゃないかと、立ち位置の弱さを感じることもありました。でもスポーツは数字で見えないところに力を持っている。その価値を再確認し見いだしていきたいですね」

刈屋「アテネからつなぐ東京です。体操ニッポンの強さは？ 僕はやはり『美しさ』だと思う」

富田「それと、どんな状況でも力を出し切る強さ。美しい体操で魅了することができても、結果につながらなければただの上手な選手。美しさを兼ね備えた上で強い。指導する上で一番、目指すべきところです」

刈屋「演技の時はいつもリラックスした表情でしたね。難度の高い技でも難しいことやっているという顔をそうは見せなかった」

富田「顔に出さずに、自然な動きで表現する。その域に達してこそ美しい体操。言葉で表現するのが難しいんですが、刈屋さんが実況で(つり輪の十字懸垂の演技を)『まるでリビングでくつろいでいるよう』と表現してくださり、言いたいことが伝わりました(笑い)」

### 【アテネ五輪から 17 年】

刈屋「17 年前のアテネ五輪、しっかり覚えてる？ 富田さんが、28 年ぶりの日本の金メダルを決めた瞬間。僕は毎年、同じ話してるからよく覚えてます(笑い)」

富田「僕は演技していたので刈屋さんの名実況(伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ!)は聞いてませんが、後に映像は繰り返し見ました(笑い)」

刈屋「当時は練習前のアップがなく、しかも 3-3 方式【注 1】。恐怖心や不安はありましたか？」

【注 1】チーム構成は 6 人。演技前のアップは認められていなかった。決勝は 6 種目で 6 人のうち 3 人が演技。各点数が得点に加算されるためミスが許されず、安定した演技が求められた。

富田「アップがない五輪は最初で最後で、誰も経験していませんでした。ただ、そこにつけ込む隙があるなど。日本人ならではの繊細さで、感覚を研ぎ澄ませることを日頃から心掛けました。晴れの日や雨の日に、温度や湿度を敏感に感じ取れるようにバーの感触や(滑り止めの)炭酸マグネシウムの付き方などを確認しました」

### 【白熱の最終種目】

刈屋「7 大会ぶりの団体総合制覇を懸けた決勝は 7 位スタートでた」

富田「実力的に抜けてた中国(前年世界選手権金)が床で日本の下にいて、中国でも失敗するんだと怖さを実感しました。あとは試合展開でどうにかするしかないと思いました」

刈屋「決勝での各国の状況は把握してましたか？」

富田「ある程度は。平行棒あたりで追いつくと思ってましたが、想定通りの試合展開になりました」

刈屋「最終種目の鉄棒は中国が早々と脱落し、ルーマニア、米国とほぼ横一線になった時に『復活』という言葉が降りてきた。富田さんの着地の練習をずっと見てきたから『体操ニッポン復活への架け橋だ』というフレーズが浮かんで。ルーマニアの落下、米国の技の加点なしでの着地と、3 つの奇跡【注 2】が重なったと思いましたね」

【注 2】の大本命の中国がミスを連発し優勝争いから脱落の鉄棒で最初の

演技になった首位のルーマニアが落下ミス③米国の世界王者ポール・ハムが技を出さずに着地し得点伸びず。

富田「3番手で演技した私は、待っている時間が長いので見てましたね。周りを見ることも安心材料にもなるので力になりましたし。すごく簡単に言えば、全てがかみ合った五輪でした」

#### 【ためにためた実況】

刈屋「富田さんの演技直前、サイドのスタッフが手書きで出した優勝への得点『8.962』を見た瞬間、これは金メダルへの数字だ、勝ったと思った。富田さんが演技構成に入れたコールマン【注3】さえ取れば9.8までいから、着地で失敗しても金。つまりコールマンが成功した時点で金だと思いました」

【注3】鉄棒の離れ技。バーを越えながら、後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり懸垂。

富田「失敗のリスクがあるとすればコールマンでした」

刈屋「価値点を落とさず挑んで全選手中最高の9.850点でした。コールマンを成功させた瞬間は？」

富田「会場が『ド～ン』って。大歓声で鉄棒、揺れたんじゃないかと。鳥肌立てて演技しました。五輪の最終演技は一生にあるかないか。もう少し長く演技していたいなと。なので、いつも以上に丁寧に演技しました」

刈屋「そして、フィニッシュの伸身の新月面宙返り。演技の最後はためにためて、ゆっくり回るようにして降りたよね。だから僕も『伸身の新月面が描く放物線は～』とためにためてから、富田さんがピタッと着地した瞬間に合わせて『栄光への架け橋だ！』って叫んだ」

富田「演技を満喫していましたね。後に映像を見て、実況の刈屋さんに迷惑かけてしまったなあと(笑い)」

刈屋「着地が1歩、2歩、動いても金だったのにピタッと止めたのがすごい」

富田「『日本、勝ったぞ！』という強烈な印象が色濃くなりましたね。決めにいって、止まったことで『栄光への架け橋だ』が伝わったんだと思います」

#### 【アテネ五輪の団体総合決勝 VTR】

日本は最初の床運動から、いきなりトップの米国と0.826点差の7位発進。その後はあん馬、つり輪、跳馬、会共ル洲洲平行棒で追い上げ、首位、ルーマニアと0.063点差の2位で最後の鉄棒へ。ルーマニアは1人落下、

僅差で3位に付けていた米国は2人が安全策で構成を落として得点が伸びず。日本は米田が9.787点、鹿島が9.825点、最後の富田が9.850点で金メダルを獲得した。

富田「同じ技をしても違う技と思われる、オリジナルな唯一無二の表現を心掛けていました。膝や肘の伸ばし方、タイミング、自分の体でしか表現できない美しさ。それを他人がまねしたくなるような」

刈屋「東京五輪で体操日本が見せていく、と」

富田「それがベストです。見る人を魅了し、子供たちがそれを見て未来へとつながっていくと思うんです」

刈屋「15日からは代表選考会の全日本個人総合が開幕します」

富田「教え子の何人かが五輪の舞台へ行ってくれれば。順大のコーチとしても日本の絶対的な柱となる、飛び抜けた選手を作っていきたいですね」

刈屋「まさにアテネから東京につなぐ、栄光への架け橋ですね！」

富田「自分も頑張ろうと思わせてくれるのがスポーツの力。こんな時だからこそやり遂げて、全世界に発信できればと思います」

刈屋「ぜひ、頑張ってください！」

刈屋富士雄(かりや。ふじお)

1960年4月3日、静岡・御殿場市生まれ。

61歳。早大では漕艇(そうてい)部所属。83年にNHK入局。大相撲、陸上、体操、フィギュアスケート、競馬などを中心に28競技の実況を担当。五輪は夏冬通算16大会で、現地での実況など取材に携わった。2020年4月にNHKを退局。現在は立飛HD執行役員スポーツプロデューサーを務める。

富田洋之(とみた・ひろゆき)

1980年11月21日、大阪府出身。40歳。順大准教授、体操競技部コーチ。洛南高、順大同大学院卒。五輪は日本のエースとして出場した2004年アテネ大会で団体総合金、種目別の平行棒銀。08年北京大会は団体総合銀。05年世界選手権個人総合は笠松茂以来31年ぶり優勝。07年世界選手権では美しい演技者に贈られる「ロンジン・エレガンス賞」を日本人初受賞。08年に引退。13年から国際体操連盟技術委員。

## 【後記】

決めていた言葉『陽はまた昇りました』

富田さんとの対談で思い出したことがある。言葉は決めない主義だったが、アテネ五輪の団体総合で日本が金メダルを取った時の言葉は既に決めていたことを。「体操ニッポン、陽(ひ)はまた昇りました」と。遡ること8年前の96年アトランタ五輪で日本が惨敗した時から決めていた言葉でもあった。当時、旧ソ連のコーチが私を日本のメディアだと気づいてボソッとロシア語で何か言ってきた。通訳いわく「体操ニッポンの陽は完全に沈んだ。二度と昇ることはない」と。「なにいい!」と思った。もしアテネで実況をすることになり金を取ったら言ってやろうと決意し、付せんを書いて実況の資料(NHK放送博物館に展示中)=写真はコピー=に挟んでアテネに行った。さまざまな競技を見てきて改めて思うのは、五輪は夢がかなう瞬間であり、目標が達成される瞬間、それは人間にとってとても大切なことだと世界中の人たちと共有する瞬間だということ。こんな状況だからこそ、選手たちには胸を張って「五輪で頑張りたい」と言ってほしいと思っている。

(元NHKアナウンサー、解説主幹)